

こころのケア国際シンポジウム 『災害とこころのケアー復興と心の回復ー』を開催

兵庫県こころのケアセンターでは、阪神・淡路大震災20年及び当センター開設10周年の筋目に当たり、『災害とこころのケアー復興と心の回復ー』をテーマにこころのケア国際シンポジウムを開催しました。

1. 日 時 平成26年12月1日(月) 13:00~18:00
2. 場 所 神戸国際会議場
3. 参加者数 保健・福祉関係業務従事者や自治体職員、一般の方など240人
4. 内 容

開会にあたり、主催者を代表して吉本知之兵庫県副知事があいさつし、これまでの支援活動、研究調査を踏まえ、災害・事件後の精神科医療及び精神保健活動を行う、兵庫県こころのケアチーム「ひょうごDPAT」を発足させることを表明し、DPAT(災害派遣精神医療チーム)の活用策を含めたシンポジウムの成果に期待を寄せました。また、当機構の五百旗頭真理事長が「先進社会における災害復興にはこころのケアが不可欠であり、阪神・淡路大震災の体験の中から兵庫県こころのケアセンターが生まれたことは誇らしいことである。本日は内外から講師を迎え、実践に則しかつ専門性を持った水準の高い議論をいただけることを期待している」と述べました。

シンポジウムでは、まず、加藤寛センター長が当センターの10年の活動を振り返り、「今後はDPATを効率的に運用できるような体制づくりに寄与したい」と語りました。

講演においては、まず、福島県立医科大学の前田正治教授から東日本大震災被災地である福島の現状について、「福島県においては、地震・津波に加え、原発災害にまつわる心の問題、特に放射線降下物に対する不安・恐怖や被ばくしたと思われることへの不安があり、アウトリーチ主体の支援活動や教育啓発活動を行っているが、今後息の長い活動をどのように行っていくかが課題である」と報告がありました。

次に、災害、大事故などの直後に提供できる心理的支援マニュアルであるPsychological First Aid(PFA)作成の主要メンバーである、米国国立子どもトラウマティック・ストレスセンターテロ・災害対策部門のメリッサ・ブライマー部門長から、米国における災害時の心理的援助の方法について具体的な事例に基づいた報告がされ、「専門家が集い、共に学び合うことが重要であり、今後とも、国ごとにシステムの違いはあるが、お互いが刺激し合っていきたい」という主旨でお話いただきました。

パネルディスカッションの第1部として、まず、東北大学大学院医学系研究科の松本和紀准教授が東日本大震災における、急性期から復興期へのこころのケアに係る支援活動について報告され、「今後の課題として、仮設住宅から復興住宅への移住に伴う新たなコミュニティづくりが、精神健康上、重要になってくる」と講演いただきました。また、中華人民共和国婦女連合

会国際部アジア局の張広雲局長から、日中が協力して実施した四川大震災復興支援としてのこころのケア人材育成プロジェクトが紹介され、「地域に根ざしたこころのケアに従事する人材が育成される等の大きな成果を挙げた」と報告がありました。

パネルディスカッションの第2部として、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所災害時こころの情報支援センターの金吉晴センター長及び加藤センター長を座長として、「こころのケアの連携を巡って」をテーマに演者全員で討議がなされました。

大規模災害や事件における、こころのケアには地域の持っている「効力感」が大切であり、タウンミーティングなどを通じて地域の絆をいかに再構築していくかが課題であるとの意見が出されるとともに、阪神・淡路大震災から20年間にわたり蓄積された兵庫県こころのケアセンターのノウハウを、引き続き全国に発信してほしいとの要望がありました。

最後に、金座長より、「DPATは精神救急の専門家だけでなく、災害・事件後、こころのケアについて中長期的に支援を行っている専門家も入ったサポート体制を作っていくことが必要である」との考え方が示されました。

<パネルディスカッション>

座長：加藤 寛 [兵庫県こころのケアセンター センター長]

金 吉晴 [国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所災害時こころの情報支援センター センター長]

パネリスト：メリッサ・ブライマー [米国国立子どもトラウマティック・ストレスセンター テロ・災害対策部門長]

前田 正治 [公立大学法人福島県立医科大学医学部 教授]

松本 和紀 [東北大学大学院 医学系研究科 准教授]

張 広雲 [中華全国婦女連合会国際部アジア局 局長]